



格言に二種あり ーマ逆の格言が教えることー

面白いもので、古今東西、マ逆の格言があるものだ。「三人寄れば 文殊の知恵」、そうかと思えば「船頭多くして 船 山に上る」、「先んずれば 人を制す」、そうかと思えば「急いでば 事を仕損ずる」、「寄らば 大樹の陰」、そうかと思えば「大樹の下に 美草なし」等々と。

格言なのだから、無論それぞれに間違いはなく、正しく真理を言い当てているとっていいだろう。

だが、こうしてマ逆の^{ことわざ}諺があるということは、真理は常に一面の正しさを伝えているに過ぎず、その真理だけで世の中の^{こと}、また人の心は片^{かた}がつくほど単純ではないことを既に人々が知っているということだ。

戦後の著名な哲学者・教育学者で、私の恩師でもいらしたオットー・フリードリヒ・ボルノー先生には、『真理の二重の顔』というご本があった。その中で、先生は、「真理というものは、あけっぴろげに、あからさまに、ただ確定されさえすればよいというものではなく、むしろそれは秘められており、隠されているものである」とさえいっておられる。

だから、古いギリシア・ラテンの^{しんげん}箴言にも、一方の真理を強調し過ぎることを戒める道理が種々説かれているわけだ。「徳の過剰は不徳に転ずる」、「過度に罰する人は不正に罰するに近し」、「思慮ある間は言わば知識の半分なり」等々と。

確かに、真面目に物事に取り組もうとすればするほど、真理の顔は二重どころではないことに思い当たる。一つの組織をマネジメントするにも、一つの政策を実現するにも、一つの社会を解釈するにも、一方だけを^{ことさら}殊更に言い立て始めると、^{こと}事の真相を言い当てることから、ますます遠ざかっていってしまうものだ。

文化の理解だって、そうではないか。そもそも文化というものは、厚みのあるものなのであって、厚みのある文化を一つの思想、一つの原理、一つの理念で語り尽くすことには、必ずや危うさがつきまとうのである。具体例は、いくらでも指摘することが出来る。いや、重層的・複合的な要素を抱えもつところこそ、その文化の^{きょうじん}強靱さ、しなやかさの^{あかし}証があるうというものだ。

「一人は、常に不正をもつ。しかし、真理は、二人と共に始まる^{※※}」といったのは、ニーチェであった。だから、ボルノー先生は、「真理は、こうして一方または他方にあるのではなくて、いわば話している人たち『の間』にある[※]」と指摘しておられる。一人が語ることによってではなく、二人が語ることによって、秘められていた、隠されていた真理が^{あら}顕わになってくるということであろう。

さて、こうした真相を、はるか2500年前に見通していたのがお釈迦さまだった。後代

の学問化した大乘仏教の仏典とはやや^{おもむき}趣を異にして、^{しやくそん}釈尊が実際に語った言葉に比較的近いといわれる原始仏教の経典の中には、こういう言葉が残されている。「一切は有るといふのは、一つの^{へん}辺である。一切は^な無いといふのは、第二の辺である。如来はこれら有無の二辺を離れて^{ちゆう}中によって^{ほう}法を説く^{※※※}」。

「辺」とは、「^{かたよ}偏り」といった意味である。「法」とは、「真実」といった意味である。あれが無い、これが無いというのも、一つの偏った見方である。でも、これが無くてもいい、あれが無くてもいいというのも、一つの偏った見方である。事の真相を見抜く如来さまは、これらの二つの偏った見方を離れて、^{まなか}真中において真実を見通していくといった意味であらう。

教育学部の竹内整一先生も、近年しきりに「有と無の^{あわい}間に^{※※※※}生きる」ことを強調なさっている。

しかし、この「間」とは、数学的な中間点といった意味だろうか。どうも、そうではなさそうである。どちらに対しても等距離の妥協点といったものでは、それは、全くなさそうである。だから、一見如何に^{かたよ}片寄りしているように思われたとしても、私たちは、不正に対してははっきりと不正といわなければならない。

では、間とは、中とは、どこにあるのか。それを見極めるところに、秘められていた、隠されていた真実が浮かび上がってくるのだ。この齢になって、何を考えるにせよ、これが、私が^{たど}辿り着いた物の見方・考え方の最終的境地となった。

※参照：ボルノー著『真理の二重の顔』西村皓・森田孝訳 理想社

※※参照：ニーチェ著『悦ばしき知識』信太正三訳 ちくま学芸文庫

※※※参照：『南傳大藏経典』（相応部卷二）大藏出版株式会社

※※※※参照：竹内整一著『ありてなければ 一無常の日本精神史』角川ソフィア文庫 他

[>前のページへ戻る](#)